JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	カーディフ市に見るウェールズ語の言語景観: 二言語表記の浸透度合いとその効果
Author(s)	渡辺, 丈起
Citation	
Issue Date	2024-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/19353
Rights	
Description	Supervisor: 由井薗 隆也, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

本研究は、英国はウェールズのカーディフ市内で見られる英語・ウェールズ語の二言語表記の言語景観（linguistic landscape）を分析し、少数言語である現地語の使用とその受容について分析するものである。

自身も英語母語話者の集団でありながら、あえて少数言語を使用する言語政策が、ほかならぬ英国のウェールズに存在している。これはビジネスや学問などのオフィシャルな場において「英語さえ用意しておけばよいだろう」と考えがちな、英語"一強"の昨今への一つの問題提起ともとれる。また、知識継承や地域振興の観点からも示唆に富んでいると考えられる。このウェールズの言語政策はどこまで現地で徹底されており、市井でどこまで受容されているのか。

本論文では、上記の問いについて、言語景観の観点からまとめた。

日本でも見られるように、一般的な現地語・英語の二言語表記は、多数派である現地住民に向けた現地語と少数派である来訪者に向けた英語とを組み合わせたものが大半であろう。しかし、ウェールズの二言語表記については、現地語がむしろ少数派に向けられた案内であることに加え、英語表記が居住者・外来者の両方を合わせた多数派に向けられた情報提供を目的としている。この特徴的な位置づけにより、ウェールズ語表記は外来者に対しても文化的なシンボルとして機能。さらに現在では同言語の使用がエシカルなものとして肯定的に捉えられるようにまでなっている。

このことは、公共機関にとどまらず、民間チェーン店もが積極的な二言語表記を行っていることや、当該言語の話者比率がそこまで高くないカーディフ市内でもウェールズ語の使用が豊富に見られることなどに表れている。そして、この現象は表層では非常によく似ているアイルランドやスコットランドの言語景観とは質的にことなることを本論では突き止めた。